

5 歳児発達を記録した子どもの就学後の検討

堀江 真由美 小島 理恵子

県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科

2019年8月30日受付

2019年11月28日受理

抄 録

5歳時の発達を記録した年中児を小学校1年生まで追跡し、幼児期後半の発達の状態と就学後の学校適応との関係を調査した。年中時で発達に課題を有した児の小学校1年生の学校適応状態を検証した。その結果、年中時に質問応答に課題があった場合には、就学後の学習面で配慮を要することが分かった。また、年中時に行動面と発達面もしくは質問応答に課題があった場合には、就学後も行動面への配慮を要した。一方、年中時に行動面のみの課題があった場合には、就学後は問題を呈することはなかった。また、年中時に発達に大きな課題を有していない児でもルール理解の悪さ等の特徴がみられた場合には、就学後に学習面で配慮を要する子どももいた。さらに、年中時と小学校1年時の行動面を比較した結果、年中から小学校1年の間では5分の1の子が問題を呈する行動項目や、小学校1年で問題行動が増加する項目もあり、行動項目別に就学前後で配慮した関わりの必要性が示唆された。

キーワード：5歳児発達の記録，年中時，就学後，追跡

1 緒言

5歳時点の発達を記録した年中児を小学校1年生まで追跡し、幼児期後半の発達の結果と就学後の学校適応との関係を調査した。その上で、5歳児発達を記録することの有効性と課題について述べることを目的とする。

スムーズに就学を迎えるために就学前の段階で子どもの発達経過や発達特性を把握しておくことが望ましいとされ、5歳児健診が全国的に実施されている¹⁻³⁾。5歳児健診を年中時に実施して、さらに年長時まで追跡することで5歳児健診の有効性を述べた先行研究がある。弓削ら⁴⁾は、5歳児健診の1年後の年長時までを追跡し、年中実施の意義と行動上の問題の変化を述べている。岡田ら⁵⁾は、5歳児健診1年後の診断の妥当性を述べている。

スムーズな就学移行の検証のためには、2年後の就学後の学校での状態を調査することも必要であると考えた。そこで、本研究では5歳児発達を記録することを年中時点で実施し、就学後まで追跡することとした。5歳児発達の記録を行うことは、保育士が発達を記録し、記録した保育士自身が就学までの1年間の保育に活かす取り組みに活用すること、また子ども達がスムーズに就学へ移行していくための発達経過や発達特性を保護者や就学先へつなげる、就学支援の一つとして考えることとした。そのために、5歳児発達の記録の結果と就学後まで追跡した結果を比較し、5歳児発達の記録が就学後の状態を反映するのかを項目ごとに検証したいと考える。

2 目的

追跡調査を行った目的は、発達の問題の発見・診断の妥当性を検証することではなく、就学1年前の幼児期後期の発達上の課題の詳細と、就学後の発達上の特徴の関係を明らかにして、5歳児発達の記録を行うことの有効性と課題の検証を行った。

具体的な方法として、年中時で発達に課題を有した子どもの小学校1年生の学校適応状態を検証する。

また、年中時に発達に大きな課題を有していない子どもの小学校1年生の学校適応状態を検証する。

年中時の園内での行動特性と小学校1年生の行動面に関しての学校適応状態を比較する。そして、検証結果から年中時点のつまずきの内容に対して予測される学校適応状態に対して、配慮点を提言し、5歳児発達を記録することの有効性と課題について述べたい。

3 方法

3.1 課題

年中時に実施した課題とその通過基準を示す。また小学校1年時に実施した課題とその通過基準を示す。

3.1.1 年中時の課題

小学校1年時と比較する、年中時の課題とする。5歳児発達の記録として先行研究⁶⁾で作成した項目の一部である4課題を使用して実施した。

1) 発達問診項目：平成19年度鳥取県乳幼児健康マニュアル⁷⁾を参考に、小枝¹²⁾が実施した5歳児健診の発達問診票12項目のうち、年中児の約90%が「できる」とする11項目を用いた。残りの1項目の「家の人に伝えてから外に出かける」は通過率が74%であり、また保育士への設問項目として適切ではないため削除した。言語課題を増やすために、鳥取県⁷⁾で、診察場面で実施している「しりとり遊びができる」を項目として加え、計12項目を設定した(表1)。

2) 行動問診項目：福知山市など先進地域の5歳児モデル健診事業⁸⁾を参考に、行動に問題のある子どもがもつ特徴をあげた15項目、自閉症スペクトラム障害に関係した3項目を用いた。また不安や共感性に関する2項目を取り入れて計20項目を実施した(表2)。

3) 質問応答実施課題：質問に対して応答する課題とし、理解力、表出力を評価できる課題にした。これは語彙理解力、聴覚的理解力、統語能力等の言語能力を必要とする課題であるため、言語面のスクリーニングを行うには効率的で適していると考えた。質問内容は日常生活の中の出来事に関する質問を中心に対応の仕方や理由を答えてもらうため、既存の検査の質問の仕方を

表1 発達問診項目

1 スキップができる
2 片足でケンケンができる
3 お手本を見て四角がかける
4 大便の後おしりがふける
5 ボタンのかけはずしができる
6 集団の中に入って一緒に遊べる
7 ジャンケンの勝敗がわかる
8 自分の名前が読める
9 発音がはっきりしている
10 自分の左右がわかる
11 しりとり遊びができる
12 はさみで簡単な形をきる

表2 行動問診 20 項目の年中時と小1 時の「よくある」の人数

	年中(人)	小1 (人)
1 課題に集中して取り組めない	5	13
2 外からの刺激に気が散りやすい	11	14
3 指示通りに行動できない	3	9
4 座っているべきところで席を離れる	7	3
5 落ち着きがない	10	10
6 順番を待つことが難しい	2	2
7 手足をそわそわ動かす	5	6
8 自分からけんかになりやすい	6	3
9 かんしゃくをおこしやすい	4	3
10 ルールに従って遊ぶことが苦手	5	2
11 注意してもきかない	4	3
12 好きなことしかしない	2	4
13 友だちとうまく遊べない、一人遊びが多い	6	4
14 こだわりが強い	7	4
15 不器用である	10	12
16 急に予定が変わると混乱する	4	6
17 一方的に自分の話したいことだけを話す	3	4
18 ちょっとした音を嫌がったり、触られるのを嫌がる	2	1
19 不安が強く、場慣れが悪い	7	2
20 人の気持ちが、わかりにくい	5	5

太文字：年中時と小学校1年時 どちらも「よくある」10名以上

又は、年中時と小学校1年時の「よくある」の差が5名以上

参考に計7問作成し実施した。

4) 音韻意識実施課題：就学前の読み書きの準備性を見るものである。円滑に書きことばへ移行する準備状況は、音韻意識との関係が深いとされている⁹⁾。文字学習の準備状況が分かる音韻抽出課題であり、原¹⁰⁾を参考に実施した。課題内容は、絵図版と単語の音韻数を○で描いた紙を子どもに提示し、子どもが○を1つずつ指しながら音韻に区切って発声して音韻分解を行った後、語頭音に当たる○を指さしながら、「ここは何の音？」と尋ね音韻抽出課題を実施する。3モーラの単語を3単語用いて語頭音をたずねる課題を3試行実施した。

3.1.2 年中時の問診・実施課題の通過基準（年中169名実施時）

- 1) 発達問診項目：保育者が「できない」とした項目が12項目中5項目以上は7.1%
- 2) 行動問診項目：保育者が「よくある」とした行動が20項目中5項目以上は24.3%
- 3) 質問応答実施課題：正答が7問中4問以下は18.3%

4) 音韻意識実施課題：正答が3試行中1試行以下は12.4%

1) 2) の問診は先進的地域のスクリーニング基準を参考通過基準とした。

3) 4) の実施課題の通過基準は、就学前の子どものフォロー対象者数は、就学後の配慮を必要とする生徒数よりも多くし、就学前により配慮することを考えた。就学後通常級でない特別支援教育体制のもと教育（特別支援学校・特別支援学級）を受ける子どもがH29年では約2.69%、通常級に在籍する児童について小中学校教師が特別な支援を要する児童が6.5%在籍すると、就学後に特別な配慮を要する子どもは9%以上存在していることになる。小学校で配慮の必要な生徒数以上に就学前で配慮しながら発達を支援する必要があると考え、3) 4) 各実施課題10%台の正答率を通過基準とした。

3.1.3 小学1年時の問診項目

以下、2つの問診を年中時と比較する、小学校1年1・2学期時の問診項目とする。

- 1) 学校での適応を調べる問診項目

学習状況について、「かなり配慮」「やや配慮」「配慮は必要なし」のいずれか回答を教師に求めた。また、「問題の答えが分からず時間がかかる。又は答えに誤りが多い。」「忘れ物が多い」「授業中に話を聞いていない事がある」について「よくある」「時々ある」「ない」のいずれか回答を教師に求めた。

2) 行動問診項目 年中時実施と同様の 20 項目

3.1.4 小学校 1 年時の問診項目の通過基準

- 1) 学校での適応を調べる問診項目の通過基準はなし
- 2) 行動問診項目通過基準は、年中時と同様とする

3.2 対象

年中時実施できた 169 名中、研究依頼書に基づいて口頭及び文書で説明を行い、小学校 1 年次まで追跡することに同意を頂けた保護者と園とした。さらに小学校 1 年時点で研究依頼書に基づいて口頭及び文書で説明を行い、学校の同意が頂けた児童 51 名を対象とした。なお説明の際に、研究への参加が任意である事、研究への同意は研究対象者の自由意思で行われること、研究に参加しないことによって、不利益な対応を受けることがない事を文書に明記し口頭で説明を行った。またその研究参加の意思表示を撤回できることを保障し、文書に明記し口頭で説明を行った。

3.3 手続き

年中時に了解の頂けた園児の園にて、学校配布用の問診用紙に、氏名、就学先学校名、ID 番号を記入してもらい、園から学校へ問診用紙が在中している封書を送付してもらう。

学校からの回収の際は、学校にて氏名のみ切り離し、ID 番号のみ分かる状態の問診回答紙を調査者に送付してもらう。

調査者は ID 番号にて、年中時点と小学校 1 年時点の問診記入用紙を照合した。

年中時に担任にて 1) 発達問診 2) 行動問診 3) 質問応答実施課題 4) 音韻意識実施課題を行ってもらう。

小学校 1 年生時に担任にて 1) 学校での適応問診 2) 行動問診を小学 1 年生 1 学期と小学校 1 年生 2 学期について実施してもらう。

3.4 年中と小学校 1 年の比較

年中時で発達に課題を有した子どもの小学校 1 年生の学校適応状態を検証する。

また、年中時に発達に大きな課題を有していない子どもの小学校 1 年生の学校適応状態を検証する。

年中時園内での行動特性と小学校 1 年時の行動面に関しての学校適応状態を比較する。

4 結果

4.1 年中時で発達に課題を有した子どもの小学校 1 年生の学校適応状態 (表 3, 表 4)

年中時に 1) 発達問診 2) 行動問診 3) 質問応答実施課題 4) 音韻意識実施課題の 4 課題中のいずれかが不通過であった子どもは 19 名であり、表 3 にその内訳を示す。全課題通過した子どもは 32 名であった。

年中時に、1) 発達問診 2) 行動問診 3) 質問応答実施課題 4) 音韻意識実施課題の 4 課題中全課題もしくは行動問診を含んだ 3 課題、年中時で不通過の場合(表 4, 1 番～4 番の子ども)は、小学校 1 年 1・2 学期では学習面は配慮がかなり必要、やや必要、行動面は支援級に進学した場合には小学校 1 年 2 学期には通過となった。通常級に進学した場合には小学校 1 年 1・2 学期ともに行動面は不通過であった。

年中時で 2) 行動問診の不通過と 1) 発達問診もしくは 3) 質問応答実施課題が不通過の場合(表 4, 1 番～7 番の子ども)は、小学校 1 年 1・2 学期時点で学習面に配慮がかなり必要、やや必要で、通常級の場合には小学校 1 年 1・2 学期ともに行動面も不通過であった。

年中時で 3) 質問応答実施課題が不通過の場合(表 4, 1 番～4 番, 6 番～12 番の子ども)は、小学校 1 年 1・2 学期で学習にかなり配慮を要す子どもが多かった。

年中時で 4) 音韻意識実施課題のみ不通過の場合(表 4, 13 番～16 番の子ども)は、小学校 1 年 1 学期で、学習面にかなり配慮もしくはやや配慮を要していたが、2 学期になると学習面の配慮が軽減していく傾向の子どもが多い。

年中時で 2) 行動問診のみ不通過の場合(表 4, 17 番～19 番の子ども)は、小学校 1 年 1・2 学期ともに、

表 3 年中時に 4 課題中のいずれかが不通過の児の内訳

	人数 (人)
4課題もしくは行動問診を含んだ3課題	4
行動問診・発達問診/行動問診・質問応答	7
質問応答	11
音韻意識のみ	4
行動問診のみ	3

表4 年中時に発達の課題を有した子の通過状況と小学校1年生時の学校適応状態

番号	年中				小学1年 1学期	小学1年 2学期	小学1年 1学期	小学1年 2学期	小学生
	発達 問診	行動 問診	質問 応答	音韻	学習面	学習面	行動	行動	進学状況
1	○	×	×	×	×	△	×	○	支援学級
2	×	×	×	×	×	×	○	○	支援学級
3	×	×	×	×	×	×	○	○	支援学級
4	○	×	×	×	△	△	×	×	通常級
5	×	×	○	○	×	×	×	×	通常級
6	○	×	×	○	×	×	×	×	通常級
7	○	×	×	○	△	△	×	×	通常級
8	○	○	×	×	×	△	×	○	通常級
9	○	○	×	○	×	×	○	○	通常級
10	○	○	×	○	×	×	×	×	通常級
11	○	○	×	○	×	×	○	○	通常級
12	○	○	×	○	△	△	○	○	通常級
13	○	○	○	×	×	△	○	○	通常級
14	○	○	○	×	△	○	○	○	通常級
15	○	○	○	×	△	○	○	○	通常級
16	○	○	○	×	○	○	○	○	通常級
17	○	×	○	○	○	○	○	○	通常級
18	○	×	○	○	○	○	○	○	通常級
19	○	×	○	○	○	○	○	○	通常級

学習面 かなり配慮要：×，やや配慮要：△，特別な配慮不要：○
 その他の面 通過：○，不通過：×

学習も行動も問題なしになっている。

4.2 年中時に発達に大きな課題を有していない子どもの小学校1年生の学校適応状態
 (学校適応に配慮が必要な場合) (表5)

20番の子どもは、年中時では全4課題全て通過していた。2)行動問診については20項目中「不器用である」の1項目よくある行動とされていた。また、年中時の保育士のコメントには「理解力の弱さがある」というコメント記載があった。小学校1年1学期は学習面にかなり配慮を要した。学習面の様子では「答えが分からず時間がかかる」、「授業中話を聞いていないことがよくある」という状況であった。行動面も小学校1年1学期は不通過となり、「課題に集中して取組めない」「外からの刺激に気が散りやすい」「指示通りに行動できない」「不器用である」「急に予定が変わると混乱する」「一方的に自分の話したいことだけを話す」「ちょっとした音を怖がったり、触られるのを嫌がる」という7項目でよくある行動を呈していた。小

学校1年2学期になると学習面では、やや配慮を要するレベルとなり、行動面は気になる行動が全くない状態になっている。

21番の子どもは、年中時では全4課題全て通過していた。2)行動問診については20項目中気になる行動は全く無かった。また、年中時の保育士のコメントには「遊びのルール理解が悪い」というコメント記載があった。小学校1年1・2学期は学習面にかなり配慮を要した。学習面の様子では「答えが分からず時間がかかる」、「授業中話を聞いていないことがよくある」「忘れ物が多い」という状況であった。教員のコメントより「声かけしないと取り組めない」「学校だからしないといけないという緊張感がない」があった。行動面は小学校1年1・2学期ともに通過となり、「課題に集中して取組めない」の1項目でよくある行動を呈していた。

22番の子どもは、年中時では全4課題全て通過していた。2)行動問診については20項目中気になる行動は全く無かった。また、年中時の保育士のコメント

には「集団遊びに入らない」「白黒はつきりつけたがる」というコメント記載があった。小学校1年1・2学期は学習面にやや配慮を要した。学習面の様子では「答えが分からず時間がかかる」、「授業中話を聞いていないことがよくある」という状況であった。行動面も小学校1年1学期では不通過となり、「指示通りに行動できない」「不器用である」「急に予定が変わると混乱

する」「こだわりが強い」「人の気持ちが分かりにくい」という5項目でよくある行動を呈していた。教員のコメントより「自分の考えていること以外言われると理解できずにパニックになる」面があった。しかし小学校1年2学期になると行動面は気になる行動が全くない状態であった。

表5 年中時に発達に大きな課題を有しない児の小学校1年生の学校適応状態

年中(5歳児発達の記録)	小学1年1学期		小学1年2学期		小学2年1学期		小学2年2学期		小学1年1学期	
	学習面	行動	学習面	行動	学習面	行動	学習面	行動	学習面	行動
質問 音韻 保育士コメント										
20	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

学習面 かなり配慮要：×，やや配慮要：△，特別な配慮不要：○
 その他の面 通過：○，不通過：×
 小学1年1学期「よくある」行動：文頭表記

4.3 年中時と小学校1年1学期時の行動面の比較

4.3.1 年中時と小学校1年時 どちらも「よくある」10名以上の行動問診項目(表2)

「2. 外からの刺激に気が散りやすい」項目は「よくある」と答えたのは、年中は11名、小1は14名であった。「5. 落ち着きがない」項目は「よくある」と答えたのは、年中は10名、小1は10名であった。「15. 不器用である」項目は「よくある」と答えたのは、年中では10名、小1では12名であった。

行動問診20項目中3項目で、年中時、小学1年時ともに10名以上「よくある」行動とされた。

4.3.2 年中時より小学校1年時で5名以上増加した「よくある」行動問診項目(表2)

「1. 課題に集中して取り組めない」項目は「よくある」と答えたのは、年中は5名、小1は13名であった。「3. 指示通りに行動できない」項目は「よくある」と答えたのは、年中は3名、小1は9名であった。

行動問診20項目中2項目で、年中時より小学1年時に5名以上多く「よくある」行動とされた。行動問診20項目の他の項目では年中時より小学校1年時で「よくある」行動とされる項目は減少もしくは変化なしの行動項目が多く、小学校1年時で「よくある」行動とされる項目が増加している項目でも1~2名増加であった。

4.3.3 年中時より小学校1年時で5名以上減少した「よくある」行動問診項目(表2)

「19. 不安が強く、場慣れが悪い」項目は年中時に「よくある」であったが、小学1年生になると「ときどきある」「ほとんどない」となり、年中時に「よくある」行動であっても、成長して小学生になると目立たなくなる子どもが多くいる行動項目であった。

5 考察

5.1 年中時に発達に課題を有した子どもの小学校1年生の学校適応状態

年中時に4課題もしくは行動問診を含んだ3課題で不通過の場合には、小学校1年時には学習面での配慮を要することが予測される結果となった。行動面は支援学級という少人数教育で子どもの特性に合わせる事が大切にされた結果、行動面も落ち着く結果となった

と考えられた。つまり行動面は所属する環境で落ち着き異なる結果となった。これは進路検討の1つの指標となる。

年中時に行動問診の不通過と発達問診もしくは質問応答実施課題のような言語課題が不通過の場合には、小学1年時では学習面への配慮を要することが予測された。行動面は通常級の場合には小学校1年1・2学期を通して、学校適応しにくいと予測された。年中時に行動問診のみ不通過の場合は、小学校1年時で自分の机や椅子という枠組みを設けられ、予告された時間割通りに進むことで、見通しが取れ、行動の問題を呈さない可能性があることが予測された。年中時行動面のみ問題を呈していた場合と行動面の問題と同時に一般的な発達や言語理解力・表出力が遅れている場合では、小学校1年時での行動面での適応状態に違いが見受けられた。小学校生活において学習面が学校適応することが落ち着いた生活を送る基盤となると考えられた。

年中時に質問応答実施課題が不通過の場合は、小学1年1・2学期を通して学習面に配慮を要し、学校生活に慣れた2学期でも学習の積み上げ困難、言語指示理解困難を予測する結果となった。就学前から質問内容の言語理解および言語表出が就学後の学習面の状況にある程度予測する可能性が示唆された。

年中時に音韻意識実施課題のみ不通過の場合には、小学校1年1学期では新しいことの学習の積み上がりに時間を要し、ルール理解の悪さが見受けられた。しかし課題や状況の慣れに伴い学習面も積み上がり始める傾向が示された。この課題は言語でのルール説明を理解する必要があり音韻意識を評価する課題であり、さらに就学前児のルール理解を評価する課題にもなった可能性がある。

5.2 年中時に発達に大きな課題を有していない子どもの小学校1年生の学校適応状態

以下、学校適応に配慮が必要な場合について述べる。年中時では大きな問題を呈していないものの、保育者が理解力の弱さを気になる特徴としてコメントしていた場合、小学校1年1学期の入学当初で、学習面でも行動面でも学校適応の悪さを呈した子どもがいた。しかし小学校1年2学期になると学校生活に慣れ、動き方を理解できる頃には、学習面で配慮を要するも行動面は学校適応の状況になった。園生活では分かりにくかった本児の困り感は、慣れの悪さに起因している。新しい環境でルールの理解ができずに困っている様子が伺えた。

年中時では大きな問題を呈していないものの、保育者が「集団遊びに入ろうとしない」、「白黒はつきりつけたがる」ことを気になる特徴としてコメントしていた場合、環境の変化や求められる行動を自分なりに理

解できない場合、小学校1年1学期の入学当初で、学習面でも行動面でも学校適応の悪さを呈した状態の子どもがいた。しかし、小学校1年2学期で学校生活に慣れると、少しずつ変化を受け入れていくのかもしれない。

以上より、51名中3名ではあるが、年中時で課題は通過した場合でも、園生活で理解力の悪さ及び集団ルールを受け入れられないと保育者が感じた場合、就学直後に学習面で配慮を要し、学習面の影響もあるのか、園では見受けられなかった行動面での配慮を要していた。しかし、学校生活に慣れるに従い行動面は落ち着きを取り戻していた。この3人に関しては、環境が変化したことで混乱し、不安な状況が行動面、学習面に反映された可能性が考えられる。5歳児の課題が全課題通過した場合でも、保育者の観察力で集団内での適応が気になる場合には、小学校入学当初に不安をもって行動していることも想定し、小学校生活が予期できる関わりが求められる事例であった。

5.3 年中時と小学校1年時の行動面の比較

年中時でも小学校1年時でも「外からの刺激に気が散りやすい」「落ち着きがない」「不器用である」の項目は、51人中10人以上の5分の1の子どもが「よくある」行動であり、4歳から7歳までの子どもには、日常的によく見受けられる行動だと考えられた。つまり、これらの項目がよくあるという事では、就学移行のためのスクリーニングはできない項目と言える。これらの行動は年中時から小学校1年までの間の成長や支援によっても改善されにくい行動だと言える。この点は弓削⁴⁾が年中時とその1年後の年長時で行った結果でも同様に報告しており、本研究の2年後の検証でも同様のことが言えた。

小学校1年時で年中時より多く「よくある」行動として「課題に集中して取り組めない」「指示通りに行動できない」項目が指摘されている。これらの項目は、小学校で求められる行動として、個人専用の椅子に着席して指示された課題遂行することができない、言語指示を理解した行動ができないと言える。就学前の園と小学校との環境の違いにより、求められる行動が異なるために、年中時よりも小学校で気になる行動項目と言える。「課題に集中して取り組めない」「指示通りに行動できない」項目が「よくある」場合は年中時では少人数であるが、小学校入学当初では約5分の1の子どもが日常的によくある行動だと考えられた。その点を保護者や指導者も留意しながら行動を見ていく必要がある。

年中時に「よくある」行動とされた「不安が強く、場慣れが悪い」は、小学校1年時には見受けられなくなる子どもが多くいる項目だと言える。成長に伴い経験値が上がると新奇な場面でも対応できると考えられ

る。その一方で、この項目が多くの子どもでは発達の中で減少していくため、小学校1年時でも「よくある」行動であった場合、配慮を要する可能性のある子どもとも捉えられる。

結論

5歳児発達の記録を年中時に行うことで、小学校1年次の学校適応予測が可能になり、年中時期でのつまずきに合わせた対応の必要性が示唆された。また年齢別に多くの子どもに見受けられる行動傾向があることが浮き彫りになった。この点を考慮し対応する必要性も示唆された。

5歳児発達を記録するために実施した問診や実施課題を通過しても、小学校入学後に学校適応が難しい子どもがいた。そのため5歳児発達の記録の今後の課題として、保育者のコメントを拾いあげ対応に繋げるために、園生活を送る上で子どもの理解力が乏しいと感じる程度を段階的に指し示す視覚的なスケールで記録するなど、質問内容を工夫する必要性を感じた。

謝辞

本研究にご協力くださった先生方、児童、保護者の方々に深謝いたします。

文献

1) 小枝達也：軽度発達障害発見に対する5歳児健診の有用性の検討。厚生労働科学研究費補助金（子

ども家庭総合研究事業）軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究。平成18年度 総括・分担研究報告書、1-6, 2007

- 2) 小枝達也, 関あゆみほか：ちょっと気になる子どもたちへの理解と支援—5歳児健診の取り組み—。LD研究, 35:265-272, 2007
- 3) 辻井正次：就学相談において子どもの発達経過を把握することの意義—楽しい学校生活のスタートをきるために。こころの科学, 124:45-48, 2005
- 4) 弓削マリ子, 全有耳：5歳児モデル健診受診児の1年後の検討。脳と発達, 41:269-274, 2009
- 5) 岡田香織, 森裕子ほか：発達障害児の発見における5歳児健診の有用性。児童青年精神医学とその近接領域, 55(1):15-31, 2014
- 6) 堀江真由美, 玉井ふみ：就学移行支援に向けて保育所・幼稚園で実施する発達評価の試み—5歳児の発達スクリーニング試案—。人間と科学, 12(1):69-78, 2012
- 7) 鳥取県：平成19年度版鳥取県乳幼児健康診査マニュアル。鳥取県福祉保健部健康対策課, (オンライン), 入手先< <http://www.pref.tottori.lg.jp/secure/249478/ippan.pdf> >, (参照 2011-3-1)
- 8) 弓削マリ子, 全有耳：5歳児モデル健診に取り組んで—京都府中丹西保健所と福知山市の協働事業—。LD研究, 35:273-281, 2007
- 9) 天野清：語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習。教育心理学研究, 18(2):12-25, 1970
- 10) 原恵子：通常の学級・通級における音韻のアセス

Relationship Between the Developmental Status of Children at the Age of 5 and Adaptability After Elementary School Enrollment

Mayumi HORIE Rieko KOBATAKE

Department of Communication Sciences and Disorders, Faculty of Health and Welfare,
Prefectural University of Hiroshima

Received 30 August 2019

Accepted 18 November 2019

Abstract

To clarify the relationship between the developmental status during the second period of infancy and adaptability after elementary school enrollment, the development of children at 5 years of age was recorded, and they were followed up until the first year at elementary school. Among these children, the adaptability of those who had developmental challenges during the second year of nursery school was examined during the first year of elementary school. Children who had difficulty in correctly answering questions during the second year of nursery school required learning considerations after elementary school enrollment. Children who had both behavioral and developmental challenges or difficulty in correctly answering questions during the second year at nursery school also required behavioral considerations after elementary school enrollment, whereas those who only had behavioral challenges during the second year at nursery school did not have any problems thereafter. Furthermore, among children without any major developmental challenges during the second year of nursery school, some who had exhibited specific characteristics, such as difficulty in understanding rules, required learning considerations after elementary school enrollment. On comparison of behaviors during the second year of nursery school and during the first year of elementary school, one-fifth of all children had problems in some behavioral domains within this period or problematic behaviors were increasingly observed during the first year of elementary school in some domains, suggesting the necessity of comparing behaviors in each category before and after elementary school enrollment.

Key words: the development of recording for 5 years old children, the second year of nursery school, after elementary school enrollment, follow up